

びわこ学院大学 令和六年度 一般選抜（国語）

（注）設問で指示をした字数には句読点等も含みます。

【一】次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

住空間をきれいにするには、できるだけ空間から物をなくすことが肝要ではないだろうか。ものを所有することが豊かであると、僕らはいつの間にか考えるようになった。

高度成長の頃の三種の神器は、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、その次は、自動車とルームクーラーとカラーテレビ。戦後の飢餓状態を経た日本人は、いつしか、ものを率先して所有することで、豊かさや充足感を噛み締めるようになっていたのかもしれない。しかし、考えてみると、快適さとは、溢れかえるほどのものに囲まれていることではない。むしろ、ものを最小限に始末した方が快適なのである。何もないという簡潔こそ、高い精神性や豊かなイメージーションを育む（a）オンショウであると、日本人はその歴史を通して、達観したはずである。

慈照寺の同仁斎にしても、桂の離宮にしても、空っぽだから清々しいのであって、どちらやどらやと雑貨やら用度品やらで溢れているとしたなら、目も当てられない。洗練を経た居住空間は、簡素にしつらえられ、実際にこの空間に居る時も、ものを少なくすっきりと用いていたはずである。用のないものは、どんなに立派でも藏や納戸に収納し、実際に使う時だけ取り出してくる。それが、日本的な暮らしの作法であつたはずだ。

しかしながら、今の日本の人々の住宅は、仮に天井をはがして俯瞰するならば、どこの世帯もおおむね夥しいもので溢れかえっているのではないかと想像される。率先して所有へと突き進んだ結果である。（1）かつて腹へこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケットを持つていないと不安なのである。しかし冷静に判断するなら、両方の手に何も持っていない方が、生きていく上では便利である。両手が自由なら、それを振って挨拶もできるし、時には花を活けることもできよう。両の手がビスケットでいつも（b）塞がれていては、そういうわけにもいかない。

ピーター・メンツエルという写真家の作品に『地球家族』と題された写真集がある。これは多様な文化圏の家族を撮影したものだ。それぞれの家族は、全ての家財道具を家の前に持ち出して並べ、家を背景にして写真に収まっている。どのくらいの国や文化、家族の写真が収められていたかは正確に記憶していないけれども、鮮明に覚えているのは、日本人の家財道具が、群を抜いて多かったことである。日本人は、いったいいつの間にこんなにたくさん道具に囲まれて暮らしはじめたかと、啞然とした気持ちでそれを眺めた。無駄と言い切ることはできないまでも、なくともよいものたちを、よくぞここまで細かく取り揃えたものだとあきれ。別の言い方をするならば、ものの生産と消費の不毛な結末を静かに指摘しているようなその写真は、僕らがどこかで道を間違えてしまつたことを暗示しているようであった。

ものにはそのひとつひとつに生産の過程があり、マーケティングのプロセスがある。石油や鉄鉱石のような資源の採掘に始まる遠大なものづくりの端緒に（c）遡つて、ものは計画され、修正され、実施されて世にかたちをなしてくる。さらに広告やプロモーションが流通の後押しを受けて、それは人々の暮らしのそれぞれの場所にたどり着く。そこにどれほどのエネルギーが消費されることだろう。その大半が、なくともいいような、雑駁とした物品であるとしたらどうだろうか。資源も、創造も、輸送も、電波も、チラシも、コマーシャルも、彼らの大半が、暮らしに渦りを与えるだけの結果しかもたらしていないとするならば、これほど虚しいことはない。

僕らはいつしか、もので溢れる日本というものを、度を越えて許容してしまったかもしれない。世界第一位であったGDPを、目に見えない誇りとして頭の中に装着してしまった結果か、あるいは、戦後の物資の乏しい時代に経験したものへの渴望がどこかで幸福を測る感覺の日盛りを狂わせてしまつたのかもしれない。秋葉原にてもブランドショップにても、過剰なる製品供給の情景は、ものへの切実な渴望をひとたび経験した目で見るならば、確かに頗もしい勢いに見えるだろう。だから、いつの間にか日本人はものを過剰に買い込み、その異常なる量に鈍感になつてしまつた。

しかし、そろそろ僕らはものを捨てなくてはいけない。捨てるところのみを「もつたいない」と考へてはいけない。捨てられるものの風情に感情移入して「もつたいない」と感じる心持ちにはもちろん共感できる。しかし膨大な無駄を排出した結果の、（2）廃棄の局面でのみ機能させるのだとしたら、その「もつたない」はやや鈍感に過ぎるかもしれない。廃棄する時では遅いのだ。もしそういう心情を働かせるなら、まずは何かを大量に生産する時に感じた方がいいし、そもそもなければそれを購入する時に考えた方がいい。もつたいないのは、捨てる」とではなく、（3）廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。

だから大量生産という状況についてもう少し批評的になつた方がいい。無闇に生産量を誇ってはいけないのだ。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴイステイックな成長意欲だけではない。(4) 所有の果てを想像できない消費者のイメージーションの脆弱さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。そして必要でもないものを溜め込むことは決して快適ではないし心地よくもない。

良質な旅館に泊まると、感受性の感度が数ランク上がつたように感じる。それは空間への気配りが行き届いているために安心して身も心も解放できるからである。しつらいや調度の基本はものを少なく配することである。何もない簡素な空間にあってこそ、畳の目の織りなす面の美しさに目が向き、壁の漆喰の風情にそそられる。床に活けられた花や花器に目が向き、料理が盛りつけられた器の美しさを堪能できる。そして庭に満ちている自然に素直に意識が開いていくのである。ホテルにしても同様。簡潔に極まった環境であるからこそ一枚のタオルの素材に気を通わせることができ、バスローブの柔らかさを楽しむ肌の纖細さが呼び起こされてくるのである。

(中略)

白木のカウンターに敷かれた一枚の白い紙や、漆の盆の上にことりと置かれた青磁の小鉢、塗り椀の蓋を開けた瞬間に香りたつ出し汁のにおいに、ああこの国に生まれてよかつたと思う刹那がある。そんな高踏な緊張など日々の暮らしに持ち込みたくないと言われるかもしれない。緊張ではなくゆるみや開放感こそ、心地よさに繋がるのだという考え方もあるだろう。家は休息の場でもあるのだ。しかし、だらしなさへの無制限の許容がリラクゼーションにつながるという考えは、ある種の(d) ダラクをはらんではいまいか。ものを用いる時に、そこに潜在する美を發揮させられる空間や背景がわずかにあるだけで、暮らしの喜びは必ず生まれてくる。そこに人は充足を実感してきたはずである。

伝統的な工芸品を活性化するために、様々な試みが講じられている。たとえば、現在の生活様式にあつたデザインの導入とか、新しい使い方の提案とかである。自分もそんな活動に加わったこともある。そういう時に痛切に思うのは、漆器にしても陶磁器にしても、問題の本質はいかに魅力的なものを生み出すかではなく、それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるかである。漆器が売れないのは漆器の人気が失われたためではない。今日でも素晴らしい漆器を見れば人々は感動する。しかし、それを味わい楽しむ暮らしの(5) 余白がどんどんと失われているのである。

伝統工芸品に限らず、現代のプロダクトも同様である。豪華さや所有の多寡ではなく、利用の深度が大事なのだ。よりよく使い込む場所がないと、ものは(e) 成就しないし、ものに託された暮らしの豊かさも成就しない。だから僕たちは今、未来に向けて住まいのかたちを変えていかなくてはならない。育つものはかたちを変える。「家」も同様である。

ものを捨てるのはその一歩である。A をより前向きに発展させる意味で「捨てる」のである。どうでもいい家財道具を世界一たくさん所有している国人から脱皮して、簡潔さを背景にものの素敵さを日常空間の中で開花させることのできる纖細なB をたずさえた国の人々に立ち返らなくてはいけない。

持つよりもなくすこと。そこに住まいのかたちを作り直していくヒントがある。何もないテーブルの上に箸置きを配する。そこに箸がぴしりと決まつたら、暮らしはすでに豊かなのである。

(原研哉『日本のデザイン』岩波新書)

注 「慈照寺の同仁斎」・・・銀閣寺にある書斎
「桂の離宮」・・・京都にある有名な日本庭園
「青磁」・・・透明感のある青緑色の磁器

問一 傍線部 (a) ～(e) のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

(a) オンショウ (b) 塞がれ (c) 邂つて (d) ダラク (e) 成就

問二 傍線部 (1) 「かつて腹へこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケットを持っていないと不安なのである」とあります
が、誰のどのような状態を例えたものですか。簡潔に答えなさい。

問三 傍線部（2）「廃棄の局面でのみ機能させる」について、「もつたいない」をどう考へる」とかを簡潔に答えなさい。

問四 傍線部（3）「廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されること」とはどういうことを表していますか。そのことを端的に示す言葉を文中より五字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線部（4）「所有」について、次の（一）・（二）の各問いに答えなさい。

（一）「所有」の本来の目的は何だと筆者は述べていますか。その内容を示す表現を、文中より二十五字以内で抜き出しなさい。

（二）また、今の日本人の「所有」のあり方を表した表現を、文中より二十字以内で抜き出しなさい。

問六 傍線部（5）「余白」とはどういうものですか。その内容を示す表現を、文中より二十五字以内で抜き出しなさい。

問七 **A**・**B**に当てはまる言葉を文中より抜き出しなさい。なお、Aについては傍線部（3）より前の文章から六字の言葉を、Bについては傍線部（3）以降の文章から三字の言葉をそれぞれ抜き出しなさい。

問八 筆者の趣旨と一致するものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、家は休息の場であり、不要なものは捨て、ゆるみや開放感があることで心地よさに繋がる。

イ、伝統工芸品の活性化には、まずいかに魅力的な素晴らしい漆器を作るかが重要となる。

ウ、企業が消費者の購買欲を高めるための策略を図ることにより、なくともよいものを生み出した。

エ、ものを所有することが豊かなのではなく、ものをなくすことであわたしたちの生活は豊かになる。

オ、戦後の物資の乏しい時代を経験している日本人が、物を消費することで豊かさを求めるることはやむを得ない。

〔二〕次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

書籍編集者として三十二年間勤めた出版社を定年退職した日、私は自分が手がけた本のタイトルと著者名を書き出してみた。ああ、我ながらよくやったものだ、と自己満足に（a）浸りたかった訳ではない。ほんの出来心から、会社の茶封筒（中には年金や健康保険にまつわるややこしい書類、退職者で作る親睦グループ「空耳会」への入会案内書などが入っていた）を裏返し、遠い記憶を思い出すままに走り書きしていつただけのことである。しかしもちろん、無事会社を勤め上げた日の夜、一人書斎の机に座り、本棚からはみ出した本の山々に囲まれ、多少**A**的な気分に（b）陥つっていたのは否定できない。

実際作業をはじめてみれば、意外にもするすると一冊一冊がよみがえってきて、自分で驚くほどだった。多少あいまいなところも、手帳を開けばすぐさま明らかになった。不思議なことに、ちょっととした誤解から一度と会えない関係になつたり、行方不明で連絡が取れなくなったり、もう随分前に死んでしまった作家や詩人たちの方が、より生々しく思い出された。彼らと交わした言葉、仕草、酒の飲み方、電話の声、グラに書き込まれた赤い文字。そういうさまざまなものたちと共に、彼らの本の姿が、判型から帯の文句、花布の色まで、茶封筒に映し出された。

私は、名物、花形、敏腕、などの形容とは無関係の編集者だった。ベストセラー作家を数多く抱え、若き天才を華々しくデビューさせるようなタイプとは程遠かった。地道さと粘り強さだけが取り柄で、他には何も誇れる点などなかつた。

私が担当した書き手たちの多くはベストセラーとは無縁だったが、皆、高い志を持つていた。しかもその志の高さが世間ではなかなか（c）ムクわれず、立ち往生したり、やけを起こしかけたり、沈黙の沼に沈んだりしていた。そんな彼らの傍らにあり、「大丈夫です。あなたが向かおうとしている場所は正しいのです。何の心配もいりません。もしあなたが途中であきらめたら、あなたが書こうとしているそれは、永遠に置き去りにされたままなんですよ」と、（1）声にならない声で耳打ちするのが私の役目だった。

編集者の中には道を先回りし、自らが**B**となつて作家が行くべき方向を照らす人もいる。互いの手首を紐で結び合つた、盲人ラ

ンナーと伴走者のような関係を築く人もいる。それに比べれば私の果した役目は、ずっと（d）ヒカえめなものだったと言わざるを得ない。私が最も恐れたのは、書き手たちの邪魔になることだった。それは時に、本の表紙に誤植を出す失敗よりも重大な恐れであった。

『邪魔者になるな。』この一行を私は、編集者人生を貫く警句とした。尊敬し惚れ抜いた作家であればあるほど、無闇に近づきすぎないよう細心の注意を払い、彼らの視界の最も目立たない片隅に居場所を定めた。ただしその一隅は秘密の通路で鼓膜とつながっていなければならなかつた。役目の大半は耳打ちであつたからだ。地下からくみ上げられた一滴の水が維管束いからんそくを伝つて雌しへへと養分を運ぶような、ささやきが書き手へと伝わる通路、それを採り当てることが最も大事な務めだった。その通路さえ確保しておけば、書き手たちは『C』の言葉を、編集者からの声ではなく、自分の心の内から響いてきたもののように聞き取り、一行めを書き付けるためにはペンを握ることができたのだ。

リストはすぐさま百冊を超える、茶封筒の裏一面では足りない気配になつてきた。部屋を取り囲む本たちはいつそう静けさを増し、カーテンを引き忘れた窓の向こうは闇に満たされていた。机の上は手帳からこぼれ落ちた名刺や、意味不明のメモ用紙や、色見本帳のチップなどが散らばっていた。

書き手たちと会つて別れる際、タクシーであろうとエレベーターホールであろうと駅のホームであろうと、私は彼らの後ろ姿が完全に見えなくなるまで見送つた。社会人のマナーとしてというより、（2）そうしないではいられない自らの欲求に従つた結果、というのが正しかつた。ほんのわずか力を入れればたちまち折れてしまうほどの一本を頼りに生きていく彼らは、一本のペンと同じくらいか弱く、その弱さは後ろ姿にのみ表れ出た。大御所も新人も関係なかつた。

降り出した雨に肩を濡らしながら、あるいは夜明け前の薄ぼんやりした明かりの下で疲れきつた体を持て余しながら、彼らの後ろ姿を眺めるのが私は好きだつた。そこに浮かぶ深い弱さを感じ取り、掌にすくい上げ、じつと見つめることは、一冊の尊い本を読むのと同じだつた。

私は見送つていたのではなく、祈つていたのだろうと思う。（3）おぶつたものの重みに押し潰され、ばつたり両膝をついた拍子に、握つたペンを手放してしまわないよう願つていたのだ。

ただ、正直に言えば、祈るよりは悪態をつきたくなるような人柄の書き手も、いるにはいた。こんなにも素晴らしい小説を生み出せる人がなぜ、と打ちのめされる思いを抱いたことは、一度や一度ではなかつた。しかし編集者にとって（4）書き手の人柄は守備範囲外の問題だ。少なくとも自分はその方針を通した。どんな悪人であろうと、その手が書き上げた一冊が（e）シジヨウの喜びをもたらすのであれば、私は彼の本を無条件で愛することができた。彼の背中に向かい、祈りを捧げることができた。

いつしかリストは茶封筒を埋め尽くしていた。タイトル、著者名、タイトル、著者名、タイトル、著者名の連なりは、他人からすれば単なる記号に過ぎないだろうが、私にとっては多くの書き手たちから贈られた一続きの（5）抒情詩ふじょうだつた。

最後の一冊までたどり着くと、もう一度読み返して漏れがないかチェックし、誤字脱字を直し、全体を眺めてちょっととしたアクセントを加えるつもりで、タイトルの前に全部小さな黒丸を打つていつた。そしてすべての作業を終えたあと、そこだけ残してあつた先頭、生まれて初めて自分が作った本という名称を与えられるたつた一つの空欄に、そつと一行記入した。

・『物理の館物語』（作者名 不明）

（小川洋子『物理の館物語』新潮社）

注 「花布」・・・製本で中身の背の上下両端に貼り付ける布

問一 傍線部（a）～（e）のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

（a）浸り （b）陥つて （c）ムクわれ （d）ヒカえめ （e）シジヨウ

問二 □Aに入る適語を次より選び、記号で答えなさい。

ア、直観 イ、感傷 ウ、能動 エ、情緒 オ、自虐

問三 **B** には「行くべき方向を照らす」ものを表す名詞が入ります。当てはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

問四 **C** に当てはまる五字以内の表現を、文中より抜き出しなさい。

問五 傍線部（1）「声にならない声で耳打ちする」とありますが、それを心がけていた理由を簡潔に答えなさい。

問六 傍線部（2）「そうしないではいられない自らの欲求」とはどういう気持ちからうまれたものですか。簡潔に説明しなさい。

問七 傍線部（3）「おぶつたものの重み」とはどういうものですか。簡潔に説明しなさい。

問八 傍線部（4）「書き手の人柄は守備範囲外の問題」とはどういう意味ですか。解答欄に従つて簡潔に答えなさい。

問九 傍線部（5）「抒情詩」について、タイトル、著者名の連なりが「記号」でなく「抒情詩」であるとはどういうことですか。簡潔に説明しなさい。